

## 徒然草

### エチオピアのユーカリの木

豊間根則道  
(株) 国際開発センター主席研究員

エチオピアの風景を形作っている一つの重要な要素はユーカリの木です。ユーカリは成長すれば高さ 20 メートルを越える、柳によく似た葉の喬木です。その樹形は独特で、遠くからでもそれとよく分かります。アジス・アベバの町中でもそちこちに立っていて、国会議事堂の横の敷地には樹高 30 メートルになんなんとする大木が整列しています。地方に出れば、ユーカリの木はなだらかな大地のところどころに島のように木立をなしていたり、農家の周囲をぐるりと取り囲んで屋敷林のように植わっていたり、風景の中に馴染んでいます。

しかし、ご存じのようにユーカリはもともとオーストラリアが原産で、エチオピアに自然に生えていたものではないはずです。それがなぜ？

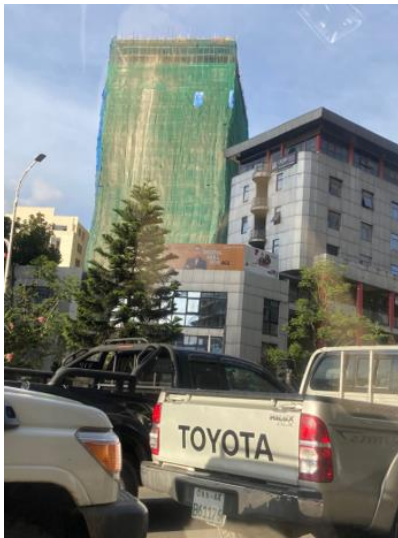
調べてみると、ユーカリは、1770 年、植物学者ヨセフ・バンクスの手で原産地のオーストラリアから初めて持ち出され、その後世界中に広まることになったのだそうです。エチオピアには 1894 年かその翌年に入って来ました。時の皇帝メネリク 2 世のアドバイザーだったフランス人がアジス・アベバにユーカリを植える許可を皇帝から受け、移植したのが最初だということです。当時すでにアジス・アベバでは薪を取るために林の過伐採が進んでいたのがその理由です。面白いことに、1913 年には一転してユーカリの伐採令が出されたそうですが、誰も従わなかったのが、今に至る風景が残った由。なぜ伐採令が出されたかという、これもご存じのようにユーカリは水を吸う力が非常に強いため、「水を吸い尽くす」ことを恐れたからだったそうです。

アジス・アベバにユーカリの木を最初に植えたのは住民が日々燃やす薪を取るためでした。確かに、ユーカリの木は成長が非常に速いことで有名です。それゆえ木質は柔らかく、工芸品や家具には向かないのですが、しかし、薪として燃やすのには十分で、成長が速い分、利点もあるというわけです。実際、私がエチオピアを初めて訪問した 1986 年当時には、町の北側の山の斜面一面にユーカリ林が広がり、そこで薪を伐って背負って降りてくる人々を何人も見ました。それから 37 年、ユーカリ林は今も健在ですが、そのような薪を背負った人の姿を目にすることは滅多にありません。

アジス・アベバでは薪としての使命を終えたかに見えるユーカリですが、実はその役目はまだ終わっていないのです。いや、むしろ他の用途に使う木として、ますますその重要性和商品価値を高めているように見えます。どんな用途に使われているのかというと、まずは丸太の材木として、そして家を建てる建材としてです。これが今のエ

チオピアにおけるユーカリの二大用途で、その需要は大きく、それゆえにエチオピアの風景の中でユーカリの木が卓越して見えるのです。

丸太材としてのユーカリの利点は傑出しています。日本の杉と同じく、枝が少なく、幹がまっすぐに伸びるからです。伐採して樹皮をはげばそのまま手頃な丸太になります。市中で主に使われるのは径がせいぜい 10 センチまでの細いもので（太いものは電柱になります）、長さは 5 メートルほどまで。径によって大、中、小と分けたユーカリ丸太の売場や置場はアジス・アベバ市内でも数多くみかけます。この丸太の最大の使い道は何かというと、ビル建設工事の足場です。



ユーカリの丸太製足場

日本ではビルはもっぱら鉄骨を組んで造るようになりましたから、ビルを建てる際に足場を組むことはなくなりました。しかし、エチオピアでは未だ鉄筋コンクリート造が主で、ビル全体を囲む足場を組むのが普通です。また、床を張る時には下からそれを支える必要がありますが、それにも丸太が使われます。そういうわけで、ビル工事現場では何百本という丸太が必要になるのです。20 階建ぐらまでは平気でこの丸太製足場を組み上げていきますから、下から見上げると壮観です。ユーカリが比較的軽い木であることも利点となっているのでしょう。

他方、径が 3 センチほどの細い丸太にも大事な使い道があります。それはモップや箒やスコップの柄です。今は中国製のものも輸入されていますが、さすがにこれらは国内製品も負けじと頑張っていて、アジス・アベバのマーケットに行けばユーカリの細い丸太を柄にした、まっさらなモップをたくさん売っています。エチオピアの人にはこちらの方が安いし、使い勝手がいいのでしょう。ホテルのメイドやお役所の掃除婦が使っているのもこれです。

もう一つの大きな用途は家を建てる際の建材です。さすがにアジス・アベバ市内で伝統的な家を見ることはまずありませんが、農村に出れば伝統的な家ばかりになります。10 年ほど前、二度目にエチオピアを訪れた際に、アジス・アベバを出て南西に 250 キロほど離れたジンマまで車で行ったことがあります。沿線の風景を見ていて、伝統的な家屋がユーカリ材をふんだんに使って建てられていることを知りました。この辺りの伝統家屋は円形のレイアウトと草葺き屋根が特徴になっていますが、次のように建てます。まず、ユーカリ丸太を半割りにした材をすき間なく地面に並べて差し、直径 5 メートルから大きいものでは 8 メートルほどの丸い囲いを造ります。その中心に一本の長い丸太を立て、そこから放射状に細い丸太を囲いに向けて差しかけ、屋根の骨組みを作ります。囲いの材木には泥を内側と外側から塗ってすき間を埋め、壁にします。最後に屋根を草で分厚く葺いて完成します。日本の縦穴式住居が 2 メートルほ

ど持ち上がったような格好をしています。ただ、近年は屋根を草葺から波トタン板に替えるところも多く、それに伴って建物のレイアウトも円形から四角形に変わりましたが、半割り材を並べてから泥を塗る工法は昔のままです。加えて、屋敷の周囲には同じくユーカリの半割り材をすき間なく差し並べ、ぐるりと柵で囲うのが伝統のようです。材の先端は削って尖らせてありますから、アメリカの植民時代を彷彿とさせます。

つまり、この辺りの住居の伝統では、一軒の家を建てるのに大量のユーカリ材を使うのです。加えて首都圏での旺盛な丸太需要があります。全国の消費量は相当なものになるでしょう。この膨大な需要をどうやって賄っているのでしょうか。その答えはユーカリ林、ユーカリ畑です。

ジンマまでの道に沿う地域はアジス・アベバよりも標高が随分低いようで、雨量も多いのでしょう。緩い起伏の大地にメイズやソルガムの畑が広がり、バナナが育ち、点々と広葉樹林があります。その林を成している樹木の種類はさまざまですが、一つがユーカリでした。ユーカリが林を作っているのです。林と言っても、区画は小さいものです。大きくても1反歩ほど。畑の隅の一角にある場合が多く、屋敷の境界に一列に植わっていることもあります。ただ、その数が非常に多い。まさに風景の一部を成すほどにあるのです。このユーカリは自然に生えたのでも、眺めるために植えたのでもありません。木を育て、伐って売るために人が植えたのです。このユーカリ林こそ、大切な「商品作物」を育てる「畑」なのでした。



アジス・アベバに立つユーカリの巨木

よく見て行くと、ユーカリ林は伐ったそのつど新たに植林するのではなく、幹を伐採したあとに切り株から出てくるひこばえ（蘗）をそのまま伸ばすことで次々と生産していることが分かりました。何年でどのくらいの径まで成長するのかは審らかにしませんが、おそらく10年もしないうちにそこそこの太さになるのでしょう。それを伐り出して売ります。最近出荷したばかりのユーカリ林では、何代も繰り返し幹を伐られてきた株が、もこもこと黒い異形の固まりのようになって並んでいます。まさに先祖伝来の「ユーカリ株」、そして「ユーカリ畑」なのです。ああ、そういうことなのかあとその時深く納得しました。

エチオピアに移植されて 130 年にもならない新参者のユーカリが、ここまで深く人々の生活に関わり、「伝統」家屋を造るのに欠かせない材料にまでなっているというのは驚くべきことです。（ユーカリ渡来以前には何を使って家を建てていたのかという新たな疑問が湧いてきますが、それは置いておきましょう。）エチオピアの風景の中ですらりと伸びて遠目にも目立つユーカリ林が実は固有の天然林なのではなく、人が植えて育ててきた人工林、それも極めて活発に生産中の林なのだを知って、風景の見え方が変わりました。外来の特定の樹木が人間の暮らしにこれほど密接に関わっている例は他にそうないのではないのでしょうか。